

司式:高橋智津子
奏楽:山田 絵里

前奏:「主キリスト、神のひとり子よ」(D. ブクステフーデ)

招詞:新しい歌を主に向かって歌え。全地よ、主に向かって歌え。主に向かって歌い、御名をたたえよ。日から日へ、御救いの良い知らせを告げよ。(詩96:1-2)

讚美歌:17「聖なる主の美しさ」

交読 詩33:1-11

- 01 主に従う人よ、主によって喜び歌え。主を賛美することは正しい人にふさわしい。
- 02 琴を奏でて主に感謝をささげ/十弦の琴を奏でてほめ歌をうたえ。
- 03 新しい歌を主に向かってうたい/美しい調べと共に喜びの叫びをあげよ。
- 04 主の御言葉は正しく/御業はすべて真実。
- 05 主は恵みの業と裁きを愛し/地は主の慈しみに満ちている。
- 06 御言葉によって天は造られ/主の口の息吹によって天の万象は造られた。
- 07 主は大海の水をせき止め/深淵の水を倉に納められた。
- 08 全地は主を畏れ/世界に住むものは皆、主におののく。
- 09 主が仰せになると、そのように成り/主が命じられると、そのように立つ。
- 10 主は国々の計らいを砕き/諸国の民の企てを挫かれる。
- 11 主の企てはとこしえに立ち/御心の計らいは代々に続く。

朗読聖書①創世記17:1-6

◆契約と割礼

- 01 アブラムが九十九歳になったとき、主はアブラムに現れて言われた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしに従って歩み、全き者となりなさい。
- 02 わたしは、あなたとの間にわたしの契約を立て、あなたをますます増やすであろう。」
- 03 アブラムはひれ伏した。神は更に、語りかけて言われた。
- 04 「これがあなたと結ぶわたしの契約である。あなたは多くの国民の父となる。
- 05 あなたは、もはやアブラムではなく、アブラハムと名乗りなさい。あなたを多くの国民の父とするからである。
- 06 わたしは、あなたをますます繁栄させ、諸国民の父とする。王となる者たちがあなたから出るであろう。

朗読聖書②ローマの信徒への手紙 4:13-25

◆信仰によって実現される約束

- 13 神はアブラハムやその子孫に世界を受け継がせることを約束されたが、その約束は、律法に基づいてではなく、信仰による義に基づいてなされたのです。
- 14 律法に頼る者が世界を受け継ぐのであれば、信仰はもはや無意味であり、約束は廃止されたこととなります。
- 15 実に、律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違犯もありません。
- 16 従って、信仰によってこそ世界を受け継ぐ者となるのです。恵みによって、アブラハムのすべての子孫、つまり、単に律法に頼る者だけでなく、彼の信仰に従う者も、確実に約束にあずかれるのです。彼はわたしたちすべての父です。
- 17 「わたしはあなたを多くの民の父と定めた」と書いてあるとおりです。死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父となったのです。
- 18 彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ、「あなたの子孫はこのようになる」と言われていたとおりに、多くの民の父となりました。
- 19 そのころ彼は、およそ百歳になっていて、既に自分の体が衰えており、そして妻サラの体

も子を宿せないと知りながらも、その信仰が弱まりはしませんでした。

- 20 彼は不信仰に陥って神の約束を疑うようなことはなく、むしろ信仰によって強められ、神を賛美しました。
- 21 神は約束したことを実現させる力も、お持ちの方だと、確信していたのです。
- 22 だからまた、それが彼の義と認められたわけです。
- 23 しかし、「それが彼の義と認められた」という言葉は、アブラハムのためだけに記されているのではなく、
- 24 わたしたちのためにも記されているのです。わたしたちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じれば、わたしたちも義と認められます。
- 25 イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。

祈祷

ご在天の父なる神さま、あなたの聖名を賛美致します。

新しい年になり、先週は礼拝と聖餐の恵みに与りました。また、ライブ配信によって兄弟姉妹と共に礼拝を献げることができましたこと感謝を申し上げます。

降誕節第三主日は『公現日』と言われる日です。私どもはクリスマスのお祝いと喜びの日を終えました。御子イエス・キリストは公に姿を現し、あなたの福音をもたらしてくださいました。御子は人の姿となり、この世に生まれ、地上に栄光に満ちた方として遣わされました。私たちはアブラハムの信仰に倣い、洗礼者ヨハネから洗礼を受けた御子イエス・キリストに倣い、神を信頼致します。私たちの救いの基となり、平和の礎に感謝を致します。

主よ、愚かな高慢な私たちを受け入れ、正しい言葉を使う人間にならますように導いてください。私たちは知らずにたくさん罪を犯しております。お赦しください。

私たちの教会は100年を過ぎました。記念事業として2冊の本を発行できましたこと感謝申し上げます。私たちの教会は、これから何を語り、何を為すべきかを私たちに教えてください。そして、礼拝と宣教へと導いてください。教会が祈りの家となり、勇気と力を与えてください。御言葉を通して主の御旨をお与えください。

主よ、あなたが私たちを見つけてくださいましたその私たちの中から一人の人もこぼれることなく、共に信仰を強めていけますように祈ります。教会に集うお一人おひとりの信仰こそが大切であると確信致します。新しく教会の門を叩く者をお導きください。この世で、苦しい戦いの最中にある者、傷ついている者、疲れている者、悩んでいる者を癒し、慰めてください。主よ、どうか、その方々が平安を得るまで励ましてください。あなたが祝福を与えてくださることを信じます。

私たち教会員一人ひとりに豊かに聖霊を注いでください。笠原義久先生を通して語られる御言葉を聞こうとしております。先生が聖霊の力を受けて語り、私たちが聖霊の助けを受けて理解ができるようにお導きください。

世界の様々な問題に目を向けますと、多くの悲しみ、苦しみ、憎しみに満ち溢れております。隣人を愛し、お互いに思いやる心をお与えください。そして、多様で寛容な社会になりますように祈ります。共に喜びの日が、そして共に喜びの歌を歌える日が来ますようにお祈り致します。

今日、世界中で行われる全ての教会の礼拝に、あなたの祝福があります

ように祈ります。これらの祈り、私たちと共に居られるイエス・キリストの聖名によって御前にお献げいたします。アーメン。

讚美歌 204「よこびの日よ」

講壇「望みを抱いて」 笠原 義久

私たちは2026年という新しい年、主の恵みの年を加えられ、その歩み出しをすでに始めています。しかし、“神は何故に私たちに新しい時を備えられるのか。私たち各々の人生に、楽しいばかりは言えない、むしろ労苦の多いであろう時を更に加えられるというのは一体何のためなのか。教会が、その働きやその存在が、明々と照り輝くというよりは、自らの無力さや抱える問題のゆえに悩み苦しまなければならない、そのような時を新しく与えられたというのは一体何のためなのか。”この問いに対して私たちの側からの明確な答えはありません。はっきりしているのは、“今の時は、神がその御国を来たらせるための準備の時として置かれ、私たちはその備える時に生かされているのだ”ということであります。しかし“神はその御国を来たらせるため何を準備しておられるのか、その準備の時というのは具体的に言えば何のためなのか。”この問いに対して新約聖書『ペトロの手紙二』は、次のように記しています。

主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるのではありません。そうではなく、一人も減びない皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。(3:8b, 9)

また或る人は、“人が歳を加えられていくのは何のためなのか、それは各々の者が信仰を深めるため、神の国を待つ者として、御心が地に行われるように祈り働くためである”と、そのように言っています。

私たちが新しいと年を加えられたというのは、決して自明のことではなく、“御国の成就に際して、私たちが一人として減びることがないように”という神の配慮の故であり、そしてこの時、神ご自身がそのためにいよいよお働きになり、そのお働きに私たちを与らせようとしておられる。私たちは今、“志を新しくさせられて、救いのための神のお働きに目を開かされて、各々の者が一層神に仕え、隣人とこの時代のために精一杯祈り、生き、そして働く者とさせられたい。神は御国の成就の備える時として新しい年を設け、そのために私たちが祈り、生き、働くように”と、この年を与えておられるのではないのでしょうか。

今朝の御言葉、殊に『ローマの信徒への手紙』4:18の「彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて信じた」、この御言葉に目を留めたいと思います。これが、神が備えてくださった時の中に置かれている者の有り様にほかなりません。“望みえないときになおも望みにおいて生かされる”ということ、神の忍耐と配慮、即ち神のご支配の時の中に生きている者の有り様にほかなりません。“望みえないのになお望みにおいて生かされる”ということ。ですから「望み」ということは「生きる」ということの別表現です。“望みが失せても、なお生き続ける”のは、“地獄の責め苦にも等しい”。旧約聖書で「われわれの望みは尽きた」と言ったイスラエルは、避けがたく「われわれは絶え果てる」と、そのように言葉を続けざるを得なかったのです。しかしここで御言葉は「望みは尽きたのになお望みにおいて生きた」とそのように言っています。一体このような“望みは尽きたのになお望みにおいて生きた”そのような強靱なあり方というものが何故可能なのでありましょうか。

“彼は望み得ないのになお望みを抱いて信じた”、その「彼」とは、その前の箇所から分かるように、“すべての者の父アブラハム、信仰の父であるアブラハム”のことです。従って私たちは“望み得ないのになお望みを抱いて信じた”この御言葉を、アブラハムの信仰を背景にしつつ聞かなければなりません。ここと直接に

関係しているアブラハムの記事は創世記15:1-6と、先ほどお読み戴いた17:1-6にあります。この二つの箇所は“神が祝福の契約の相手としてアブラハムを選び、その具体的な形として彼に子孫を与え、彼を多くの国民の父とする”、そういう約束を与えている箇所です。この記事によれば、その時、アブラハムは99歳、妻サラは90歳でした。しかもサラは子供の産めない女性でした。しかし神からアブラハムに対して「子孫を与え、その子と子孫が祝福の受け取り手となる」という、そういう約束が与えられたのです。要するに人間の目には不可能と見えること、望みのあるはずのないことが可能であり、そして実現すべき確かな望みとして約束されたのです。『ローマの信徒への手紙』は“アブラハムがすでに自分の体が死んだ状態にあり、サラも子を宿せない体であることを認め、自分たちはすでに望みはないということを十分知っていた”とそのように記しています。これは、“冷めた目をもって現実を見ている一人の成熟した人間の姿”です。『アブラハムの信仰』は、そのような現実から目を反らし、現実ではない他の世界に自分を移すというそういうあり方ではありません。アブラハムは望みのない自分の現実をしっかり目を留めていました。しかしそのようなアブラハムに対して神の約束が与えられたのです。“アブラハムは自らの望み得ない現実を十分に知りつつ、しかもなお神の約束、神の御言葉への信頼の故に、望みのない現実に見望みを失うことなく、望みを堅く豊かにされた”のであります。このように望みなき事態に逆らって、真の力としての望みに生きることのできる人は幸いだと思います。しかし私たちはそのようなことのできるのは信仰深い人、自分の運命に対して勇猛果敢に戦える人、マイナスをプラスに転化できる機転のきく人、望みなしといっても一条の望みの光は失っていないそういう幸福な人、そのような人のことであって、どれも自分には関係のないことだと、そのように私たちは思っていないでしょうか。

アブラハムは確かに特別な人であつたに違いありません。けれどもその特別さというものは、ただひたすら神がアブラハムに出会い、神が彼に語りかけ、働きかけてくださったからに他なりません。決して優れた資質や従順な性質、良い洞察力、鋭い洞察力、良き働き、そのような彼の特別な才能や力によって望みなき事態に抗して望むことができたではありません。“真に信仰というは私たちの働きやあり方とは別に、ただひたすらこのような神の私たちに對する恵みの働きの事実、その事実を確認し、その事実をひたすら信頼すること”そのことによるのではないのでしょうか。

パウロはこのようなアブラハムの有り様を記すことによって、力を込めて、“信仰は恵みにより、その恵みによってあなた方は生きる”というふうに記しています。もしアブラハムが自分の力によって望みを切り開こうとするならば、彼の状況はいよいよ悲惨の様相を濃くしたことでしょう。アブラハムが望みを失わないでなお立ち得たのは、自分の力や自分の働きこそが最後の切り札であるという考え方、あり方から解き放たれ、“神の約束、神の御言葉、神の恵みこそがただ私たちを生かし立たせるものである”、そこに望みを置いたからです。そこにアブラハムが『信仰の父』と言われるその所以があるのではないのでしょうか。アブラハムは、働きがなくても“その信仰を義と認める不信心な者を義とされるそういう方”を信じたのです。“その方”とは死人を生かし存在していないものと呼び出して存在させる方、即ち無から有を呼び出される神がおられる、そのことの故にアブラハムは“なお望んで立つことができた”のであります。このように“死人を生かし、無から有を呼び出される神が必ず御心を為し給う”、その事実こそが望みない時になお望んで立たせるそういう力なのです。その神が主キリストにおいて私たちに臨んでおられる故に、私たちは望みのな

いような者のようにではなく、望みによって立たせられているそういう者となることができるのではないのでしょうか。

アブラハムに対して為された「子孫を与え、お前を世継ぎとする」という「約束」は、今、私たちに、そして多くの問題を抱えて行き悩んでこの時代にあって、「主が再び来られ、そしてその御国を成就される」、その「御国の世継ぎとしてお前たちを立たせる」という、この今私たちに對し、この時代に対して、そういう「約束」として与えられています。「子孫を与えて、お前を世継ぎとする」というその「約束」に、私たちに、この時代に対して確かな「約束」として与えられているのです。ですから私たちの現実がどのように惨めであり、この時代にサタンの方が勝利しているように見えても、今ここで望みを失うことは断じてできないのです。最後の勝利、そしてその勝利への希望によって、「そのような事態はすでに打ち破られ、勝利の中に私たちは置かれている」という、そのことを決して見落としてはならないと思います。

このような、来たり給う主イエス・キリストが私たちを支配なさっているという勝利の現実と約束は、ただ最終的に私たちに与えられるというだけではなく、具体的な今、毎日の私たちの生活の中にまで貫いていると言えないのでしょうか。それはキリストが私たちの生活の上に力を奮っておられるということです。神は主イエス・キリストのご支配を通して必ず御心を為し給い、あらゆる障害、あらゆる閉塞状況を神の方から打ち砕いて下さる、私たちのささやかな望みや願いを神のご計画と配慮の中で必ずや顧みてくださると、そのように神は約束してくださっているのではないのでしょうか。

このような、やがて来られる方、また、今すさまじいまでに働いておられる主キリストから、私たち一人ひとりの主、教会の主、この時代、この世の、またどのような問題領域においても唯一の主でおられるということ、キリストがそういうお方であるということ、そしてそのキリストが唯一の主であり、そして教会の主としてこの時代、この世の、そしてあらゆる問題領域の中で本当に働いておられるということ、そのことが私たちの望みの根拠であります。この主が、そのご支配を貫徹し、御自身の意思を成就し、そして御国を来らして下さる。その事実を信頼し、あくまでも固着するということが、望みなきように思える時、また望み乏しい時に、望みの中に立たせられる、そのような力となるのではないのでしょうか。

私ども、信濃町教会の100周年を記念する事業の一環として編まれ、この降誕節に刊行された『信濃町教会25年史』、その中に、この25年という時代を総括した次のような一文があります。

“この25年は、世界相対総体においても、またこの日本においても、わたしたちの予断や思いをはるかに超えた大きな出来事が勃発した時代であった。今、世界崩壊的な危機が深刻さを増している。戦争の脅威に加え、コロナウイルスの世界的脅威、さらに気候変動危機が加速している。こうした状況に対する抑止力が機能不全的な傾きを示している。”と。

世界と日本の現在の状況は、これが記された時より一段と深刻さを増しているように思えてなりません。苛立ちと怒りと悲しみが蓄積され、増幅されている、このような真つ暗闇に目を留め、根本的に事態が肯定して行くことに対し望を持つということは本当に困難なことなのでしょうか。

私たちは、死人を生かし、存在していないものを呼び出して存在させる方、無から有を呼び出される神がおられることを告知知らされている者たちです。その神は、

見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている。(イザ43:19a)

と、私たちに約束しておられる神です。この神の約束とご支配のゆえに、私たちはなおも望みを持ってこの時代の中に立つことを赦されている者たちです。もちろん私たちの教会、日本の教会も、神のお働きに自分たちも与って何かができるなどと大見え切れるという状態にはなく苦しんでいます。しかし、私たちがどんなに非力であり、苦しんでおり、問題に満ちていても、神はなおも私たちのこの教会を、この日本の地に建て用いようとしておられる。自らの不信仰に泣かんばかりの苦しみを味わっていても、また私たちの目にはどんなに望みがなく展望が開けないとしても、なお神は「新しいことを行う」という「約束」をもって、その成就に向けて必ずや私たちの行くべき道を備えてくださるとそのように信じる者です。

これが、私たちの望みの現実です。希望を失ってはならない。この神からの望み、神による望みによって私たちはこの年、各々の歩みを、また教会の歩みを、神によって本当に力づけられて、助けられて続けたいと、そのように願うものであります。お祈りします。

主よ、どうか、語りました言葉を、あなたの聖霊の働きによって生ける命の御言葉にしてください。この時間の中で御言葉が私たちすべてを慰め、励まして下さること、そのことが私たちの間に近くや遠くのありとあらゆる場所に起こるよう祈願いたします。主イエス・キリストの聖名よって祈ります。アーメン。

讃美歌 516「主の招く声が」

献金・感謝・主の祈り(橋本義武)

神さま、聖名を賛美致します。私たちはあなたから与えられた新しい時の中で生きています。あなたはこの時を生きるようにと私たちをこの時に置かれました。私たちは歴史の中のこの時代において、また自分の人生の中のこの時において、どのような望みを持って歩むことができるのでしょうか。望みを見失い、悩みの中に、畏れの中にある私たちを、あなたはこの礼拝へと招いてくださいました。御言葉をくださって私たちを望みに立つ者としてくださいました。どうか新しく与えられる一週も、あなたが下さったこの喜びの中を歩むことができますように。

神さま、ここに献げました物を聖めて神さまの御用のために用いてください。「主の祈り」を共に折り、新しい一週を始めさせてください。…『主の祈り』アーメン。

派遣：讃美歌 91「神の恵みゆたかに受け」

祝福：主イエス・キリストの恵みと、神の愛、聖霊の交わりが、あなた方一同と共にあるように。
アーメン。

報告：(1)次週全体礼拝、『感謝の祈り』カードの持参と交流会出席要請。(2)明日北支区新年礼拝案内

後奏：「主キリスト、神のひとり子よ」(H. シャイデマン)